

第 109 回新潟内分泌代謝同好会

日 時 令和元年 6 月 15 日 (土)
午後 2 時 45 分～6 時
会 場 コープシティー花園 4 階
ガレソンホール

I. 一 般 演 題

1 先天性心疾患の長期管理中に非肥満の 2 型糖尿病を若年で発症した 2 例

泉田 侑恵・阿部 裕樹・塚野 真也
新潟市民病院 小児科

近年、成人の先天性心疾患有病者で耐糖能異常のリスクが高い可能性を示唆する報告が散見される。約 4 割の複雑成人 CHD 患者が耐糖能異常を示しているという報告もある。しかし、今回、小児期においても同様の事象が起こりうることを示唆する症例を経験した。

症例 1 は 17 歳男子。37 週 0 日、体重 2628g で出生。単心室、肺動脈閉鎖のため、2 歳でフォンタン手術を施行。15 歳で高血糖を指摘、2 型糖尿病と診断された。BMI は 13.87 kg/m² と肥満を認めなかった。症例 2 は 16 歳男子。39 週 2 日、体重 1830g で出生。三尖弁閉鎖、心室中隔欠損症、肺動脈狭窄のため、シャント術施行された。14 歳の定期通院時に HbA1c 高値を指摘、2 型糖尿病と診断された。この児も BMI 14.22 kg/m² であった。先天性心疾患有病者では、小児期の非肥満であっても耐糖能異常に留意する必要があると思われる。

2 短期間の血糖改善がもたらす脂質代謝への影響

村井幸四郎・宗田 聡・橋本 浩平
安倍 正夫・北川めぐみ
新潟市民病院 内分泌・代謝内科

【目的】糖尿病教育入院期間での血糖値改善による脂質代謝への影響を検討する。

【対象と方法】当科に 2011～2018 年の間に教育入院をした糖尿病患者のうち、脂質改善薬未投与患者 385 名を対象とした。血糖値の改善程度ごとに患者群を分類し、短期間での血糖値改善が脂質代謝へ及ぼす影響について検討した。

【結果】入院期間を通して、LDL-C は平均 14.4%、TG は 29.4%、平均血糖は 66.3mg/dl の改善を認め、LDL-C、TG の改善度は血糖改善度が大きいほど、大きくなる傾向を示した。入院期間での脂質管理目標達成率は血糖改善度が大きいほど高く、特に LDL-C において群格差を認めた。

【考察】短期間にて 2 次性の脂質代謝異常症の改善は認められることが判明した。LDL-C は比較的血糖コントロールが良好な患者の血糖改善による LDL-C 管理目標値の達成率は低いため、早期の薬物治療を検討すべきと考える。

3 ミグリトール・テネグリプチン内服中に腸管気腫症を発症した、本態性血小板血症と間質性肺炎を合併した 2 型 + ステロイド糖尿病の 1 例

富井亜佐子・竹内 亮・中村 博至
滝澤 大輝・原 正雄・五十嵐智雄
新潟県厚生連合協同組合連合会
新潟医療センター 内分泌・糖尿病内科

症例は 79 歳、女性。30 年前から 2 型糖尿病で内服加療。2.5 年前から本態性血小板血症 (ET) に対しアスピリン 100mg 開始、2 年前に間質性肺炎 (IP) に対しプレドニゾロン (PSL) 開始、15mg 退院。インスリン自己注射できず、ミグリトール 100mg、テネグリプチン 20mg、ミチグリニド 25mg を開始。その後 IP に対し PSL は 10mg で維持されていた。1 年前から ET に対しヒドロキシカルバミド 500mg 隔日内服。血糖コントロールは良好でミチグリニドは漸減、4 ヶ月前にミチグリニドは中止していた。今回嘔吐・下痢をきたし入院。CT で腸管気腫症と腸間膜気腫症が認められた。ミグリトール、テネグリプチンを中止、ミチグリニド 5mg を再開、保存的加療で改善した。